

漫画におけるジェンダーについての考察

——恋愛と武闘——

雲野 加代子

1. はじめに

筆者は、1996年に「漫画におけるジェンダーについての考察—少女漫画の恋愛至上主義—」において、月刊少女漫画を調査し、女性ジェンダーの役割強要が助長され、無自覚な抑圧感の中で、少女自身を恋愛に向けさせる少女漫画の構造について考察した。

また、1997年には、「漫画におけるジェンダーについての考察—少年漫画の武闘至上主義—」で、ジェンダーとしての男性性に本来的にある、認めることのできない攻撃性の暴力が表現されているに過ぎないことを指摘し、そして男性性の持つ攻撃的衝動を幼いうちからコントロールする方法を身につけるべきであると論じた。

以上の調査から約10年経過し、世界ではさまざまな出来事があった。最も衝撃的であったのは、2001年9月11日にアメリカでの同時多発テロ、同年アメリカのアフガニスタン侵攻、つづいて2003年3月19日からのイラク空爆に始まるイラク戦争である。イラク戦争終結宣言後も続くテロとの戦いを初めとして、世界各地でのテロ勃発など、21世紀は暴力で始まった感がぬぐえない。

ジェンダーにかかわる問題としては、国連で1975年に「国連婦人の10年」が、1979年に固定的な性別役割分業の改革を理念に掲げた「女子差別撤廃条約」が採択された。日本においては、ようやく1985年「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」が批准され、同年男女雇用均等法が成立、翌年施行された。法律的にも、ようやく男女が同じ土台に立つことができる目途が立ってきた状況といえよう。

教育に関して、高校進学率は1995年度も2004年度でも男女差はほとんどない。また、大学進学率も1995

年では、女子では大学進学率よりも短大進学率高かったが、2004年になると、大学進学率が伸び、男女の差が少なくなってきた。

高校進学率¹⁾ (%)

	女子	男子
1995年	97.6	95.8
2004年	97.8	97.2

短大・大学進学率²⁾ (%)

	女子			男子		
	大学	短大	合計	大学	短大	合計
1995年	22.9	24.6	47.6	40.7	2.1	42.9
2004年	35.2	13.5	48.7	49.3	1.8	51.1

また、就職率³⁾も2004年度では、高校卒業生では女子14.7%、男子19.1%、短期大学では女子63.7%、男子47.7%、大学では女子59.7%、男子53.1%とむしろ女子の就職率が高くなっている。

就職率⁴⁾ (%)

	高校卒業生		短期大学		大学	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子
2004年	14.7	19.1	63.7	47.7	59.7	53.1

教育や就職に関して数字上は、男女の差はほとんど見られない。

NHKが5年ごとに行っている『日本人の意識』調査⁵⁾によると「理想の家庭」は、父親はなにかと家庭のことにも気をつかい、母親も暖かい家庭作りに専念しているという「家庭内協力」が増加してきている。父親は仕事に力を注ぎ、母親は任された仕事をしっかりと守つ

ているという「性別役割分担」はわずか**15%**しかいない。**20**年前と比較すると半減している。同様に、父親は一家の主人としての威厳をもち、母親は父親を守り立てて、心から尽くしている「夫唱婦随」も大幅に減ってきている。この数値には出ていないが、世代間での格差も大きく、若い世代ほど父親も母親も自分の仕事や趣味をもっていて、それぞれ熱心に打ち込んでいるという「夫婦自立」や「家庭内協力」が増加してきている。今後もっと「夫婦自立」「家庭内協力」は増加するものと思われる。

理想の家庭⁶⁾

%

	夫唱婦随	夫婦自立	性別役割分担	家庭内協力	その他
1983年	23	16	29	29	3
1993年	17	19	20	41	3
2003年	13	23	15	46	3

すなわち、男女の差別なく同等に教育を受けた世代にとって、「理想の家庭」を築くため、ともに働き、家事も男女が同等に分担・協力するという「家庭内協力」が当たり前になってくる。

前回の調査から**10**年経過して、少年少女漫画の表現は、それぞれの自立を促し、特性を生かし、お互いの理解を深めるための支援を少しでもしてきたのであろうか。ジェンダーという視点から考査してみるものである。

2. 調査対象と発行部数の推移

対象の少女漫画・少年漫画は、**2005**年**7**月から**9**月まで、前回と同じ月刊漫画雑誌を同様の方法で調査した。

少女漫画は前回**9**誌を調査した。今回は『少女フレンド』が現在発売されておらず、合計**8**誌が調査の対象である。

出版社が対象としている読者層は次の表のとおりで、上段が前回の調査、今回の調査は下段に並べた。

少女漫画では、『りぼん』の読者は、前は小学高学年が**61%**を占めていたのに対し、小学低学年が**60%**を占めており、より低年齢化してきている。同様に『ちゃお』や『なかよし』中学生の読者よりも小学生をターゲットにしてきていることが伺われる。『少女コミック』に関しては、中**1**～中**2**から中・高校生へと年齢層が広がってきている。『あすか』・『プリンセス』・

『LALA』についてはあまり変わらない。『マーガレット』に関しては、小学高学年の読者が増えたといえる。

少女漫画⁷⁾ (1995年7・8月)

書名	出版社	発行部数	読者層
りぼん	集英社	245万	小～中学生、～9歳(16%)、10～12歳(61%)、13～15歳(20%)
ちゃお	小学館	70万	小3・4年～中2・3年
なかよし	講談社	公表なし	小～中学生(公表なし)
少女コミック	小学館	60万	中1～中2
少女フレンド	講談社	20万	中学生
あすか	角川書店	20万	中～高校生(16～17歳)
プリンセス	秋田書店	25～30万	中～高校生
LALA	白泉社	30～40万	17歳(高2)
マーガレット	集英社	35万	高校中心 ～13歳(19%)、14～16歳(48%)、17～19歳(25%)、20歳～(8%)

少女漫画⁸⁾ (2005年7・8月)

書名	出版社	発行部数	読者層
りぼん	集英社	62万	小学低学年 60% 、小学高学年 9% 、中学生 23%
ちゃお	小学館	110万	小学生
なかよし	講談社	公表なし	小学3～6年(小学中・高学年)
少女コミック	小学館	30万	中・高校生中心、中学2・3年が最も多い。
少女フレンド	講談社		休刊中
あすか	角川書店	公表なし	中・高校生
プリンセス	秋田書店	公表なし	中・高校生
LALA	白泉社	17～18万	中学・高校生、平均 18・19 歳、 17 歳がピーク
マーガレット	集英社	19万部	～13歳(38%)、14～16歳(34%)

発行部数は、『りぼん』が**245**万部から**62**万部へと**4分の1**の減少、『少女コミック』が**60**万部から**30**万部へ半減し、『LALA』が**30～40**万部から**17～18**万部へ、『マーガレット』が**35**万部から**19**万部へといずれも激減している。『ちゃお』のみ**70**万部から**110**万部への増加している。『ちゃお』の読者層は、前は中学生までであったが、今回は小学生のみで中学生は入っていない。他の少女雑誌が、小学高学年から中・高校生を対象にしているので、読者層がぶつからないから増加したのであろう。『LALA』・『マーガレット』・『プリンセス』・『あすか』・『少女コミック』などは、中学生から女子高校生をターゲットにしているので、より激しい競争が伺える。

次に少年漫画は、前は**7**誌であったが、今回は

「少年王」は休刊中(ホームページで掲載)であり、「少年キャプテン」は、1997年で廃刊となって5誌になっていた。そこで、一般書店に売られている月刊少年漫画の中で、『少年チャンピオン』を新たに追加し、6誌を調査の対象とした。発行部数は、前回は、全体で443~444万冊であったが、今回は、発行誌も減っているが、公表しない出版社が多くなっている。公表しているところでも『少年ジャンプ』が前回130万部であったのに今回は43万部と約1/3に激減している。『少年エース』は前回と同じ20万部であるが、『少年マガジン』への電話での問い合わせでは、当方の「前回は180万部でしたが……。」という質問に「横ばいです。大体200万部ですね。」との回答であった。

少年漫画⁹⁾(1995年8・9月号)

書名	出版社	発行部数	読者層
少年ガンガン	エニックス	60万	小6~中1
少年エース	角川書店	20万	中・高校生男子
少年王	光文社	25万	小学生~青年層
少年ジャンプ	集英社	130万	~10歳(3%)、11~18歳(60%)、19歳~(35%)
少年キャプテン	徳間書店	20万	中・高校生男子
少年マガジン	講談社	180万	中3~高校、社会人
ガオ	主婦の友社	8~9万	17~18歳(高校・専門学校生)

少年漫画¹⁰⁾(2005年8・9月号)

書名	出版社	発行部数	読者層
少年ガンガン	スクウェア・エニックス	公表なし	小・中学生
少年エース	角川書店	20万	男子87%、女子13%、平均17歳(小学高学年~)
少年王	光文社		(休刊中)
少年ジャンプ	集英社	43万	小学低学年6%、小学高学年18%、中学36%
少年キャプテン	徳間書店		(休刊中)
少年マガジン	講談社	200万	中学~大人
ガオ	Media works	公表なし	高校生のコアが広い(公表なし)
少年チャンピオン	秋田書店	30万	中高生中心、16~17歳と20歳過ぎの2つのピークがある

少年漫画では、発行部数が前回と変わらない『少年エース』が男子だけの読者(87%)ではなく、女子の読者率(13%)であった。『少年ジャンプ』は、前回は小学高学年から大人までと幅広かったが、今回は中学生が最も多い。明確な比較はできないが、低年齢化が伺え

る。前回は10歳までが3%であったが、今回は小学低学年が6%と、若干増加してきている。『ガオ』では、付録によっても異なるということで、発行部数・読者層などを公表していない。また、前回では出版社が主婦の友であったが、現在はMediaworksに変わっている。近々編集方針を変えるとのことであるから、現状での何らかの問題があるのかと思われる。

また、前回と比較して目立ったことは、今回は特に少女漫画において付録がおおかったことである。付録は、筆箱・手提げ袋・別冊漫画などである。漫画の1冊の単価が280~550円程度であるので、果たして採算が取れるのだろうかと思われる。『ガオ』の編集者が、「発行部数は付録によっても違います。」といていたように、発行部数は付録にも相当影響されるようである。漫画が内容としての価値でなく、付録に力を入れることからわかるように、いづれにしても、少年漫画も少女漫画もかつてのブームは去っていることが伺われる。

しかし、少年少女が読む雑誌の中では、漫画の占める割合は極めて高い。『情報メディア白書2004』¹¹⁾によると、男子では、「ふだん読んでいる雑誌」上位5位までの調査統計によると、漫画が最も多く、中でも『週刊少年ジャンプ』はどの世代でも多く読まれている。『週刊少年ジャンプ』についてみると、小学4~6年生では、1991年には73.4%あったのが、2002年では43.6%に減少。また、同様に中学生でも1991年には80.1%あったのが、2002年では42.0%となり、高校生でも1991年には67.0%あったのが、2002年では33.8%となり、いずれの世代でも半減に近い。つまり、10年前には10人のうちに7・8人は読んでいたのに、3・4人になっているということである。

また、女子でも最も読まれている『りぼん』についてみると、小学4~6年生では、1991年には59.7%あったのが、2002年では30.7%となり、中学生では1991年には30.8%あったのが、2002年では14.5%と少年漫画同様ほとんど半減している。

ふだん読んでいる雑誌¹²⁾

男子(週刊少年ジャンプ) (単位;%)

	1991年	1996年	2002年
小学4~6年生	73.4	53.8	43.8
中学生	80.1	64.2	42.0
高校生	67.0	60.2	33.8

女子（りぼん） (単位；%)

	1991年	1996年	2002年
小学4～6年生	59.7	51.3	30.7
中学生	30.8	24.6	14.5

さらに、同調査によると、女子高校生の購読雑誌は、『SEVENTEEN』や『non-no』などのように漫画からファッション雑誌に移ってきている。女子高校生が購入する漫画は、少年漫画としては1991年に『少年ジャンプ』が4位、少女漫画では『別冊マーガレット』が5位に入っている。しかし、2002年には、少年漫画として『週刊少年ジャンプ』が5位に入っているだけで、少女漫画の購読は上位5位には入っていない。

漫画の発行部数は、『情報メディア白書2004』¹³⁾の、「漫画雑誌ジャンル別年間発行部数」によると、おとなも含めた漫画の全体で、1996年では15億5800万部であり、そのうちの少年向けで約6億3200万部(40.6%)、少女漫画では約1億3600万部(8.7%)、である。2001年では全体で12億5100万部であり、そのうちの少年向けで約4億8100万部(38.46%)、少女漫画では約1億1000万部(8.8%)となっている。この5年間では、全体で3億700万部、少年漫画では1億5100万部、少女漫画では2600万部の減少である。漫画雑誌の読者は年を追うごとに減少している。

漫画雑誌の発行部数¹⁴⁾

単位：万部

	全体	少年	少女
1996年	155,800	63,200	13,600
2001年	125,100	48,100	11,000

注：全体とはおとなも含む。

しかしながら、2002年の子供向け漫画雑誌発行部数は、おとなを含めた全体の47.2%、約半数になる。漫画の影響は、相変わらず非常に大きいといえるだろう。

子ども全体の漫画雑誌の発行部数は、1996年の49.3%から、2002年は47.2%へと減少している。一方、大人向け漫画雑誌は、1996年の50.7%から2002年の52.8%へとなり、若干であるが、増加傾向にある。つまり、かつては子供文化の象徴であった漫画は、その子供が大人になり、漫画雑誌から卒業しないまま大人の文化として育ち、今や大人と子供の共有文化となっていることが、この資料からも明白になった。

10年前に15歳であった漫画少年・少女は、25歳になっている。その子どもたちが、青年向けの漫画や、レディスコミックといわれる女性用の漫画の読者になって

いることは容易に想像できるのである。

一方、10年前に比較して、漫画を読まなくなった子どもはどこに行ったのだろうか。いくつかの理由が考えられるが、最も多いと考えられるのは、この10年で急速に伸びた電子メディアである。漫画よりも、より刺激の強い動画の普及が考えられる。

『インターネット白書』¹⁵⁾によると、2004年2月末時点の調査で、インターネット利用者の市場規模は、7007.2万人と推定された。前年度より、447.8万人106.8%の増加であるという。

インターネットを始める年代について、『ニッポン人の生活時間データ総覧2005』¹⁶⁾の調査では、小学校入学以前に21%、小学生6年まで97%もの子どもたちが、インターネットを使い始めている。つまり、小学生の間にほとんどの子どもがインターネットを使用できるということである。インターネットの普及は、新たな問題も含み始めている。

子供がインターネットを利用し始めた年齢¹⁷⁾

(%)

0～2歳	2～5歳	小学1年	小学2年	小学3年	小学4年	小学5年	小学6年	中学生
1	20	22	13	14	14	8	5	3

たとえば、インターネットのgoogleで、「暴力」と入力して検索すると約207万件の情報が得られる。同じく、「攻撃」では約176万件、超能力では87万件(2005年8月検索)と実に膨大な量の情報が小学生でも手に入る。この中には、暴力団・性暴力など過激な内容も含まれる。

『インターネット時代の暴力ポルノ』¹⁸⁾によると、「この数年間における最も重要な媒体・通信・情報分野における発展の一つは主たる映像媒体手段がビデオからDVDに移行したことと、インターネットというまったく新しいコミュニケーション手段が生まれ急速に普及したことであろう。その他にも衛星放送や光ファイバーによる映像配信の普及もその中に数えることができるだろう。(中略)インターネットの普及は同時に、ポルノが敷居なく家庭に侵入してくることを意味している。」と警告を発している。

漫画を買うには、入手するためのお金、買いに行く時間や手間、店の人との対応などいくつかのチェック機能が必要である。しかし、インターネットでは、必要なものは操作方法だけである。好ましい情報も好ましくない情報も、家庭の中に餞別されることもなく簡単に入ってくる。入手のためのハードルは極めて低い。

インターネットにおける問題は、入手手段の手軽さからも雑誌よりより深刻な問題である。

いずれにしても、少女漫画も少年漫画も10年前よりかなりの程度での読者層の減少し、若干であるが低年齢化しているのではないと思われる。

3. 少女漫画のジャンルとその分析

前回の調査では、少女漫画では9誌、124編の作品があった。今回は8誌、129編である。前回は1誌当たりの作品数が13.8編、今回が16.1編となっており、1誌当たり2.3編増加している。

少女漫画¹⁹⁾(1995年7・8月)

書名	恋愛	キャリア・恋愛	学園・恋愛	スポーツ・恋愛	超能力・恋愛	超能力	ギャグ	その他	合計
りぼん	4	1	3		1		5	2	16
ちゃお	3		1	2	3		4		13
なかよし	3	1	1		3	2	3		13
少女コミック	5		2		3		3		13
少女フレンド	4	1	5		1		2	1	14
あすか	5				3	4	3	3	18
プリンセス	2		2		6		3	1	14
LALA		1	2		4	2	1	1	11
マーガレット	7	2	1		1		1		12
合計	33	6	17	2	25	8	25	8	124

少女漫画²⁰⁾(2005年7・8月)

書名	恋愛	キャリア・恋愛	学園・恋愛	スポーツ・恋愛	超能力・恋愛	超能力	ギャグ	その他	合計
りぼん	1	1	3	2	3		6	2	18
ちゃお	1	4	1	1	2	2	1	2	14
なかよし	1		5		5	1	3		15
少女コミック	7		3		1		2		13
少女フレンド	(発売なし)								
あすか	2		3		1	2	4	7	19
プリンセス	3		3		8		3		17
LALA	3		4		2	3	3		15
マーガレット	5	1	4	2	2		4		18
合計	23	6	26	5	24	8	26	11	129

雑誌数が減少したにもかかわらず、前回の漫画より増加したものは、「恋愛・学園」が17編から26編へ(172%)、「恋愛・超能力」が25編から24編(108%)へ、「その他」では8編から11編(154%)である。

一方、減少したものは、「恋愛」で33編から23編(78.4%)である。

「恋愛」は、『少女コミック』では、5誌から7誌へと増加したが、他の漫画雑誌ではすべて減少している。

少女の自立を促すと思われる「恋愛・キャリア」に着目したが、全体で6編である。小学生を対象にした「ちゃお」が圧倒的に多く4編あった。内容としては、新人アイドルの主人公が自分でデザインした衣装で、敵役とナンバー1アイドルの座を争う、ヘアデザイナーを目指す主人公の学校内でのサークル活動での活躍、芸能界や役者を目指す主人公の恋愛中心の物語。また、比較的高い年齢層を対象にした『マーガレット』では、寿司職人志望だが、跡取り息子のいる名寿司店に嫁に行きたい女の子の話。『りぼん』では、保育園でのアルバイトの中での恋愛譚。いずれもキャリアの中に入れたが、主人公のたゆまざる努力によって自立することよりも運・外見・容貌や偶然性に左右されるキャリアとは名ばかりの物語である。少女の自立を促す作品が相変わらず見当たらない。

「恋愛・学園」に分類したものは、26編と多い。「恋愛」に分類したものが前回33編から23編に減少した(78.4%)ものが、設定場面が学園になり、「恋愛・学園」に移動したのではないかと思える。学校は超名門校・超金持高校・芸能科のある高校などの設定が目立つ。

「恋愛・スポーツ」は2編増加し、5編になったが、スポーツそのものではなく、恋を巡る物語ばかりである。

「恋愛・超能力」に分類したものは、24編であるが、108%の増加で相変わらず、自分の努力でなく、異世界でのできごと・現世での不思議なできごと・自分以外のもの力での異性獲得の話である。『プリンセス』が圧倒的に多く、8編もある。

さて、以上、「恋愛」・「恋愛・キャリア」・「恋愛・学院」・「恋愛・スポーツ」・「恋愛・超能力」に含まれるキーワードである“恋愛”であるが、前回は合計83編あった。今回、漫画誌は1誌減少したが、84編である。相変わらず少女漫画は恋愛至上主義といえよう。特に、低学年を対象にした『りぼん』『ちゃお』『なかよし』では、恋愛至上主義である。しかし、その内容において、中学生対象の漫画で多少変化が見られるものもある。

たとえば、『あすか』では、その他に分類したものが7編あり、男の子が主人公のものが4編あり、「超能力・武闘」に分類できるものが5編あったことは他の少

女漫画には見られない特徴である。『あすか』の読者層は中・高校生である。先の資料で、女子高校生は漫画よりも他の雑誌を読む人が多く、漫画を読む人も少女漫画よりも少年漫画の読者が多いことはすでに述べた。そのことと関係するものと思われる。男の子が主人公のものが3編あったことによっても伺われる。また、『あすか』では、「恋愛」に分類するものが、2編、「恋愛・学園」が3編、「恋愛・超能力」が1編で、少女漫画の特質である「恋愛」が、合計19編中6編しかない。同年齢層を対象の『プリンセス』が、17編中14編もあるのとでは極めて対照的である。

また、「その他」に分類したもので、前回までは見当たらなかった「超能力・キャリア・恋」ともいべきものが、『りぼん』に1編、『あすか』にも1編ある。いずれもタイムスリップ・アイドル・歌手・恋というキーワードを主体にしている。また、少年漫画に多い「超能力・武闘」が『りぼん』に1編、『あすか』に5編ある。なお、この5編のうち、少年が主人公となっているものが3編ある。また、『あすか』には、少年が主人公のスポーツものが1編あった。

特異なものでは、『ちゃお』で「探偵もの」が一編、「原爆」を扱ったものが1編あった。今年は太平洋戦争終結60周年にともなって各メディアで満州事変、沖縄戦、また、これまで沈黙してきた人たちの証言や記録などが数多く出てきたことと無関係ではないだろう。

以上、少女漫画の主流を成すものは相変わらず、恋愛である。しかし、異性を獲得するというものだけではないということが、比較的高学年対象の月刊少女漫画の中に見られてきたことは、特筆すべきことである。

4. 少年漫画のジャンルとその分析

少年漫画では、前回は7誌、109編の作品があった。今回は6誌、114編である。前回は1誌あたりの作品が15.6編、今回が19編となっており、1誌あたり3.4編増加している。少女漫画同様作品数は増加している。

内容では、前回と同様の分類をした中で増加しているのは、「恋愛」が4編から13編(379.5%)へ、「武闘・超能力」が40編から47編(137.09%)、「スポーツ」が11編から12編(127%)となる。

少年漫画²¹ (1995年8・9月号)

書名	恋愛	武闘	超能力・武闘	超能力	スポーツ	ギャグ	その他	合計
少年ガンガン		2	7	4		2	1	16
少年エース		5	2	4		3	2	16
少年王		4	7			2	1	14
少年ジャンプ	1	3	3		5	3		15
少年キャプテン	2	1	14			1	1	19
少年マガジン	1	5	1	1	6	1		15
ガオ		4	6	2		2		14
合計	4	24	40	11	11	14	5	109

少年漫画²² (2005年8・9月号)

書名	恋愛	武闘	超能力・武闘	超能力	スポーツ	ギャグ	その他	合計
少年ガンガン	1	1	13	2	0	2	2	21
少年エース	3	1	13	3	1	3	1	25
少年王	(休刊中)							
少年ジャンプ			9		2	1	3	15
少年キャプテン	(廃刊)							
少年マガジン	1	2	3	1	5	2	3	17
ガオ	7		8	3		2	2	22
少年チャンピオン	1	6	1		4	2		14
合計	13	10	47	9	12	12	11	114

「恋愛」は、前回は4編、今回は13編となり、増加率は4倍近くになる。詳細に分類すると、「恋愛」は少女漫画と同様の分類をすると、「恋愛」2編と「恋愛・超能力」4編になるが、少年漫画には、「恋愛・超能力」の項目を設定していないので、恋愛に入れた。『ガオ』の「ef」では、学生ながら少女マンガ家として活躍する主人公が2人の少女との三角関係に悩む話である。同じく「ぷりぷり」では、未来社会に住む少女の主人公がアイドルになることを目的として100年前にタイムワープして相手を得たり、魔法の国からやってきた魔法少女の恋愛譚であるという、これまで少女漫画によくあるパターンのお話である。また、少年漫画の「恋愛」で増加しているのは、『ガオ』が圧倒的である。他の漫画誌ではほとんど増加していない。『ガオ』の読者層は、公表しないとの事であるが、電話での問い合わせには「高校生のコアが広い」とのことであるので、女子高校生に増えている少年漫画の読者層をターゲットにしたのかもしれない。あるいは、少年の中にも「恋愛」を好むものが増えてきたのかもしれない。

表には出ていないが、少女を主人公にした漫画が全体で12編あるのも極めて特徴的である。

少年漫画に出てくる少女は、かわいい子供っぽい表情で、胸が大きく腰は細く成熟した大人の肉体を持っている。今回も、同様のものも数多くある。肉体を強調し、入浴シーンや脱衣シーンなど不必要に多く、まるで大人の漫画かと思われるものもある。

しかし、多くは前回のようにすべてを受け入れてくれ、目的達成したら成功報酬としての女の子ではない。少年と仲間として一緒に闘ったり、あるいは敵として闘う少女たちが数多く出てきた。

前回の『少年ジャンプ』の「つきあってよ! 五月ちゃん」では少女が超グラマーな肉体を使い、女同士の戦いで男の子を獲得するものだったが、今回『少年チャンピオン』「ブラックマンデーナイト-女子格闘技の夜明け」の主人公である女の子が、女同士の激しい戦いの終了後に「凄っこく楽しかった!!また絶対戦ろうね」といっている。これは、元来少年の行動であり、少年のせりふであった。すなわち、少女は「かわいい」「すなお」とひとくくりにはできないものがでてきたということである。

漫画に登場する少女たちの暴力的攻撃性を含んだものが増えてきているが、攻撃性については、**Baron & Richardson** は、攻撃を「どんな形であれ、危害を避けようとする生活体に対して、危害を加えようとしてなされる行動」²³⁾と定義している。また、攻撃の男女差について**G. Green** は、次のようにいっている。「それぞれの身体攻撃の選択と性が結びついていることが確認されており、男性は身体的攻撃の使用を選択する傾向があり、女性はそれ以外を選択する傾向がある。(中略) 女兒では男児よりもはるかに関係的攻撃と名づけられたものを用いることが示されている。関係的攻撃とは友人へのダメージを通して、またはそうしたダメージへの脅威を通じて、他者へ害を与える、すなわち、被害者を仲間外れにするとか、友人関係を止めると言って脅す活動である。」²⁴⁾即ち、女子は関係的攻撃をしやすいと述べている。しかし、漫画において、関係的攻撃よりも身体的攻撃に喜びを見出す少女たちが出てきたということの意味は何であろうか。「やさしい」「すなお」²⁵⁾などという女性としてのジェンダーから解き放たれたのかもしれない。あるいは、少年たちが少女たちをある意味で自分たちと同等と考えているのかもしれない。また、単に、少年が闘うのは当たり前で、単に少年漫画のマンネリからの脱却をねらって少女たちを戦わせているのかもしれない。多方面の検討が必要と思われる。

減少したものは、「武闘」が24編から10編(48.61

%)、「超能力」が11編から9編(95.48%)となり、「武闘」が大幅減である事が大きな特徴といえる。しかし、「武闘」は減少したが、「武闘・超能力」は増加した。「武闘」と「武闘・超能力」の合計は前回7誌中64編で、今回は6誌中57編となり、全体で103.9%と若干増加している。少年漫画の根幹をなす武闘至上主義に関しては、数としてはほとんど変わらないといえるだろう。むしろ、超能力を使ってより過激になってきたといえる。

前回は、闘うための大義名分は、相手からむりやり巻き込まれてやむを得ずというパターンが多かったが、今回ははっきりしない。『少年ジャンプ』の「ドラゴンドライブ」では、「みんなで力を合わせて必ず、この世界を元に戻そう」とある。しかし、元の世界像もなく、意味のない戦いと殺戮場面がこれでもかと続く。『少年チャンピオン』では、「この作品はフィクションであり、実在の個人・団体等はいっさい関係ありません」とただし書きがある。『少年チャンピオン』『ガオ』『少年エース』『少年マガジン』も多少の表現は違うが同様のただし書きがある。ただし書きは、現実との差がほとんどないときに使われるものではないか。現代ではありえない超能力を持った異星人が出てくるようなものには、必要のないものである。それとも、少年たちは「関係ない」と書かないと現実と錯覚してしまうのだろうか。

最近、殺す理由のない殺人や殺人未遂事件、たとえば、「人を殺してみたかった」という事件²⁶⁾が報道され、人々を震撼させている。

B. クラーエは、次のようにいっている。「メディア²⁷⁾暴力との接触と攻撃の結びつきは、女性視聴者よりも男性視聴者で強く、成人と比べて児童や青年で強かった。さらにアニメや空想番組の虚構的な暴力描写のほうが、暴力的な事件のニュース報道はもちろんアクション番組や犯罪番組のような、より現実的な表現よりも、攻撃に強い影響を示した」²⁸⁾少年漫画のどのページをめくっても殺戮画面があり、その影響は、非常に大きいと考えられる。映画や小説などあらゆるドラマの中で、人は主人公が活躍する場面で自分と主人公を同化して、主人公に自分をなぞらえ、拍手喝采するのが普通のことである。主人公が活躍している場面で、敵役の身になって考える事をほとんどの場合はしない。漫画では主人公は痛めつけられても、踏みつけられても死なない。たとえ死んでも超能力のおかげで生き返る。少年漫画においてそれは顕著である。強い事は正義なのだ。弱者の痛みなど考えない。それゆえ、平気で殺戮の場面を見ることがで

きるのである。「人を殺してみたかった」ということの裏には、漫画・動画の影響が多大であると思われる。殺される側の痛みに対する思いを育まない多くの漫画・動画の責任は重大である。

スポーツは、前回 11 編、今回 12 編で前回より 1 編増えている。掲載誌は 3 誌である。『少年マガジン』では、5 編あり、バスケット、カーレース、野球 2 編、サッカーである。『少年ジャンプ』では、サッカーとアイスホッケー、『少年チャンピオン』では、4 編あり、野球 2 編、卓球 1 編、女の子同士が戦う女子格闘技 1 篇である。内容的には「武闘」と同じである。スポーツの描写も格闘技と同じである。

前回、少年漫画は擬態語や擬音語が数多く使用されていることについて述べた。1996 年『少年ガンガン』「幕末風来伝 斬郎太」では全 24 ページ中 4 ページが擬態語・擬音語のみによって表現されていた。漫画は、絵によって構成されているものであり、本来読むものではなく見るものである。絵は、だれに教えてもらわなくても、絵の表現するものをその人の持っている感性によって何かをダイレクトに受け止めることができる。一方、文章は、理解し、話し、書き、読むなど、使用するためには一定の能力が必要である。その能力を習得するためには、長期の訓練（教育）が必要である。しかし、漫画にはその必要はないに等しい。文と絵の関係が今ほど問題になる時代は、これまでなかったのかもしれない。

この数年、大学では、文章を書けない学生が多い。書いても主語と述語が全く結びつかず文章になっていないと言う嘆きをしばしば聞く。このことは、文字文化の崩壊の始まりともいえなくもない。彼らは生まれたときからテレビもあり、幼いときから、パソコンゲームにのめり込み、漫画雑誌を見ていた。その影響もあるのではないかと思われる。

以上、少年漫画において、最初の調査から 10 年たち、被害者の痛みを思いを馳せさせず、少女を巻き込む、より過激な武闘至上主義になってきたことについて述べた。

5. おわりに

少女漫画の少しだけ揺らぎ始めた恋愛至上主義と、少年漫画の少女を取り込み、さらに過激な武闘至上主義について述べてきた。

男女共同参画社会基本法（2001 年 1 月 6 日施行）には、「男女が、互いにその人権を尊重しつつ責任も分か

ち合い、性別にかかわらず、その個性と能力を發揮することができる男女共同参画社会の実現は、緊急な課題となっている」とし、第 3 条（男女の人権の尊重）では「男女が性別による差別的取扱いを受けないこと」と高らかにうたわれている。女性に対するあらゆる暴力の根絶・夫・パートナーからの暴力への対策の推進・性犯罪への対策への推進・売買春への対策の推進・セクシャル・ハラスメント防止対策の推進・ストーカー行為等への対策の推進などが盛り込まれ、社会進出する女性を応援した。

また、「児童虐待の防止等に関する法律」（施行；2000 年 11 月 20 日）「ドメスティック・バイオレンス法」（配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律 2001 年 10 月 13 日施行）「ストーカー行為等の規制等に関する法律」（2000 年 11 月 24 日施行）「セクシャル・ハラスメント法」（1999 年 4 月 1 日施行）など、弱者に対しての法律も徐々に整備され始めている。

しかし、現実には、暴力的行為は跡を絶たない。暴力的行為が跡を絶たないから、法律ができてきたともいえる。実際に暴力行為が増えたのかもしれないし、あるいは法律が成立することによって相談がしやすくなったこともあるだろう。

暴力相談等の対応件数²⁹⁾（平成 13～15 年）

区分	年次	13	14	15
暴力相談等の対応件数（件）		3,608	14,140	12,568

注 1：対応件数とは、配偶者からの暴力等の相談、援助要求、保護要求を受け、又は被害届・告訴状を受理した件数をいう。

2：平成 13 年は、10 月 13 日（配偶者暴力防止法の施行日）から 12 月 31 日までの間を計上。

『平成 16 年度警察白書』によると、少年の凶悪・粗暴犯の推移は、下の表のようになる。凶悪犯はこの 10 年で 1.6 倍に増え、強盗も 1.9 倍に増加した。

凶悪犯少年、粗暴犯少年の検挙人員の推移³⁰⁾（平成 6～15 年）

区分	年次	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
凶悪犯(人)		1,382	1,291	1,496	2,263	2,197	2,237	2,120	2,127	1,986	2,212
	強盗	911	856	1,068	1,675	1,538	1,611	1,638	1,670	1,586	1,771
粗暴犯		14,655	15,449	15,568	17,981	17,321	15,930	19,691	18,416	15,954	14,356

さきに NHK の『現代日本人の意識構造』の調査で、父親はなにかと家庭のことにも気をつかい、母親も暖かい家庭作りに専念しているという「家庭内協力」を理想の家庭としていることを述べた。

しかし、現実には若い世代の晩婚化・少子化が社会的問題になってきている。誰しも将来に対して希望や夢がなければそれに向かって進まない。結婚する喜び、子どもを育てる喜びを、自分の未来に対して描いてはじめて目的に進むことができる。漫画にはそれが描かれていない。モデルがみあたらないのである。暖かな家庭、慈愛に満ちた父母の像が描かれていない。

同じくNHKの『現代日本人の意識構造』³¹⁾の調査で、結婚に関して、未婚の男女(20~39歳)での調査で「結婚はしなくてもよい」女性は89%、男性は70%である。「するのが当然」と回答した人は、未婚の男性は25%であるが、未婚の女性はわずか9%である。結婚するのが当然と考えている未婚女性は未婚男性の1/3で、未婚の男性の10人に対して、結婚したい未婚の女性は1人程度しかいないということである。

少女たちは恋愛至上主義の漫画を見て育ち、白馬に乗った王子さまが現れるのを夢見、優しさ・思いやり・暖かさを育まない武闘至上主義の漫画を見て育った少年たちとは、心を通わすことができにくくなるのではないかと危惧している。

注

- 1) www.gender.go.jp/whitepaper/h14/2.html より作成
- 2) www.gender.go.jp/whitepaper/h14/2.html より作成
- 3) 各年3月卒業者のうち、就職者(就職進学者を含む)の占める割合である。
- 4) 『平成16年度文部科学白書』2005年3月刊 450頁より作成
- 5) 『現代日本人の意識構造 [第六版]』2004年12月刊 NHK放送文化研究所編 日本放送出版協会発行 28頁
- 6) 『現代日本人の意識構造 [第六版]』28頁より作成
- 7) 『漫画におけるジェンダーについての考察』1996年3月刊 大阪明浄女子短期大学紀要第10号 189頁
- 8) 筆者作成資料(電話による問い合わせ)
- 9) 『漫画におけるジェンダーについての考察』1997年3月刊 大阪明浄女子短期大学紀要第11号 160頁
- 10) 筆者作成資料(電話による問い合わせ)
- 11) 電通総研編 ダイアモンド社 2003年12月刊 57頁
- 12) 『情報メディア白書2004』2003年12月刊 57頁より作成

高校生は多様化して上位5位まで少女漫画は入っていない。

- 13) 電通総研編 ダイアモンド社 2004年2月刊 57頁
- 14) 『情報メディア白書2004』57頁「漫画雑誌ジャンル別年間発行部数」より作成
- 15) (財)インターネット協会監修 2005年6月刊 30頁
- 16) 2005年5月刊行 日本能率総合研究所編 267頁
- 17) 『ニッポン人の生活時間データ総覧 2005』267頁 NTTレゾナント(株)三菱総合研究所「第2回小学生のインターネット利用に関する調査」
- 18) 『論文・資料集第5号』ポルノ・売春問題研究会編 2004年11月刊
- 19) 『漫画におけるジェンダーについての考察』1996年3月刊 大阪明浄女子短期大学紀要第10号 191頁
- 20) 筆者作成資料
- 21) 『漫画におけるジェンダーについての考察』1997年3月刊 大阪明浄女子短期大学紀要第11号 162頁
- 22) 筆者作成資料
- 23) 『攻撃の心理学』2004年4月刊行 原著者; B. クラウエ (株)北大路書房 3頁
- 24) 『なぜ攻撃してしまうのか』——人間の攻撃性—— 2005年7月刊 Russell G Green 著 ブレーン出版(株) 95・96頁
- 25) 『漫画におけるジェンダーについての考察』1997年3月刊 大阪明浄女子短期大学紀要第11号 193・194頁より引用
- 26) 2005年愛知県豊川市主婦殺人事件・2003年11月大阪河内長野市の家族殺傷事件・2005年4月ハンマーで園児の頭を殴るなど。
- 27) 同書によると、メディアとはテレビ番組・家庭用ビデオ・映画作品・マンガ・コンピュータゲームなどをいう。83頁
- 28) 『攻撃の心理学』88頁
- 29) 平成16年警察白書 <http://www.npa.go.jp/hakusyo/h16/hakusho/h16/figindex.html>
- 30) 平成16年警察白書 <http://www.npa.go.jp/hakusyo/h16/index.html> 図3-9
少年とは14歳(刑事責任年齢)以上20歳未満をいう。凶悪犯(殺人・強盗・放火・強姦)、粗暴犯(暴行(けがのない場合)、傷害(けがをした場合)、脅迫、恐喝、凶器準備集合罪)をいう。
- 31) 『現代日本人の意識構造 [第六版]』52・53頁